

申請者は、昨年 2012 年の 9 月 12 日から 14 日までの三日間スラブ研究センターに滞在し、申請した研究課題である「プーシキンの作品における西洋古典文学の影響」に従った資料収集並びに研究を行った。収集のため訪れた施設は、主にスラブ研究センター図書室、及び北大附属図書館の二館である。

ゴーゴリに「国民的」と評され、ドストエフスキイに「預言的」と謳われた、彼ら二人と共に 19 世紀ロシア文学史の中で古典的地位を占め、その劈頭を飾る存在であるプーシキン。彼のロシア文学における地位並びに重要性は、西洋古典、更に広くヨーロッパ文学全体におけるホメロスのそれに相当するものと言えよう。彼の古典的性格はそのような類型的なものにとどまらない。イギリスの西洋古典学者モーリス・バウラがいみじくもプーシキンを *classical writer, classical poet* と評したことから窺われるように、彼の作品には、その創作技法や詩風においても、西洋古典の作品で感得される諸々の特徴と相通ずる点が多い。その他バウラに限らず、プロスペル・メリメを初めとして、ロシア以外の作家や研究者から彼に与えられる数々の同様の評価は、彼の本質的な側面における古典的性格を裏付けるものである。

さらにプーシキンは、リツェイ就学時よりその死に至るまで、西洋古典の作品に関心を抱き続けている。ロシア南部流刑時に記された作品に見られるオウィディウスに関する主題は、その典型的な発露の一つと言えるであろう。彼は単にロシアのみならず、世界的な視野から見ても稀に見る「古典的」詩人である。申請者は、プーシキンに見られるこの二つの意味の古典的要素、すなわち第一に、古典作品の読書から、あるいはリツェイ時代に彼が受けた古典教育そのものから受けた影響の彼の各々の作品における展開、第二に彼の作品に見られる創作技法の古典的要素の解明を主な課題として研究に取り組んでいる。

またプーシキンは、『イーゴリ遠征物語』や『ロシア聖者伝』など、自国ロシアの「古典」に当たる中世ロシア文学にも関心の目を向けている。さらに彼はその作品の中で教会スラブ語に由来する語や形態を効果的に用いているなど、スラブ文献学に関する主題もその研究上避けられない重要性を持っている。この点からも、スロベニアのスラブ学者ライコ・ナフティガルの刊行した『シナイ祈祷書』を初めとして、今回当センターのシェヴェロフ・コレクションの一端に触れられたことは誠に貴重な経験となった。

2013 年の 2 月に再度センターに滞在し資料収集などを行う予定であったが、私事のため果たせなかったのが残念でならない。しかしながら短期間ではあったものの実り多い滞在となった。滞在中にはセンター所属の先生方、並びにスタッフの方々などから数々の恩恵を被った。末筆ながらこの場を借りて篤くお礼申し上げたい。